

成果名	超早期離乳方式により育成した子牛の肥育期間中の代償性発育		
[要約]	超早期離乳方式（1ヶ月哺乳）により育成した発育の遅れた去勢牛を、11ヶ月齢で肥育を開始し18ヶ月間飼養した後出荷した肥育成績は、肥育期間中に代償性発育が見られ増体面で良好な結果が得られた。		
機関名	畜産試験場・肉用牛生産技術部	連絡先	0974-76-1270

[背景・ねらい]

超早期離乳方式を活用した飼養方法は、子牛の白痢等疾病の発生低減、発育の斉一化、個体管理の徹底と集合管理による飼養管理の効率化や、母牛の分娩後の繁殖機能回復の早期化、効率的な牛群管理等の利点が認められ、大規模繁殖農家等で既実践されている。しかし、自然哺育した子牛に較べ育成期の発育がやや遅れる傾向にあるため、この方式により飼養した去勢牛の肥育成績を調査する。

[成果の内容・特徴]

- 1 超早期離乳方式により育成した去勢牛4頭を供試し、肥育試験を実施。濃厚飼料は「とよのくに飼養体系」の飼料、粗飼料は稲ワラ並びに乾草を給与した。
- 2 肥育開始時11ヶ月齢の体重は289kgであり、全国和牛登録協会の発育推定値の下限值（284.4kg）であったが、肥育中期から発育推定値の平均値を上回り、29ヶ月齢では748kgとなり発育推定値の平均値より約60kg重たかった。肥育開始時の体高は119cmであり発育推定値の下限值であったが、29ヶ月齢では144cmとなり発育推定値の平均値とほぼ同じであった。肥育度指数は、519となり平均値を上回り発育は良好であった（図1, 2, 3）。
- 3 枝肉成績（4頭の平均値）では、枝肉重量470.9kg、口 - ス芯面積47.5cm²、バラ厚7.4cm、BMS 5.3であった（表1）。
- 4 以上のことから、超早期離乳方式（1ヶ月哺乳）により飼育された発育推定値が下限値の肥育素牛であっても肥育中期以降から代償性発育が見られ肥育終了時には標準発育以上の増体並びに肥育度が得られた。

[普及対象]

一貫経営農家

[成果の活用面・留意点]

超早期離乳方式活用に当たっての参考資料とする。

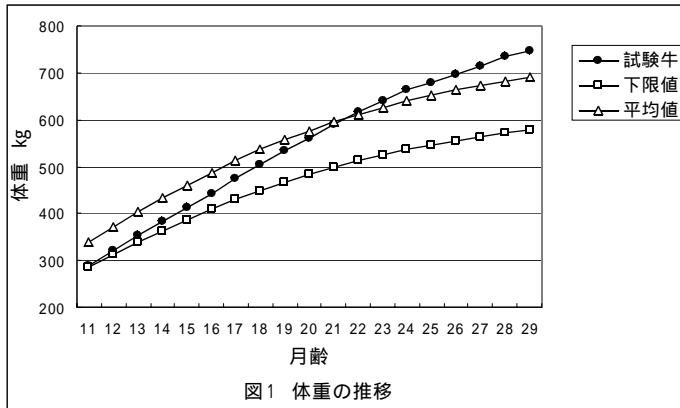


図1 体重の推移

試験牛：超早期離乳方式により飼育し、肥育した牛（n = 4）

下限値、平均値：和牛登録協会の発育推定値

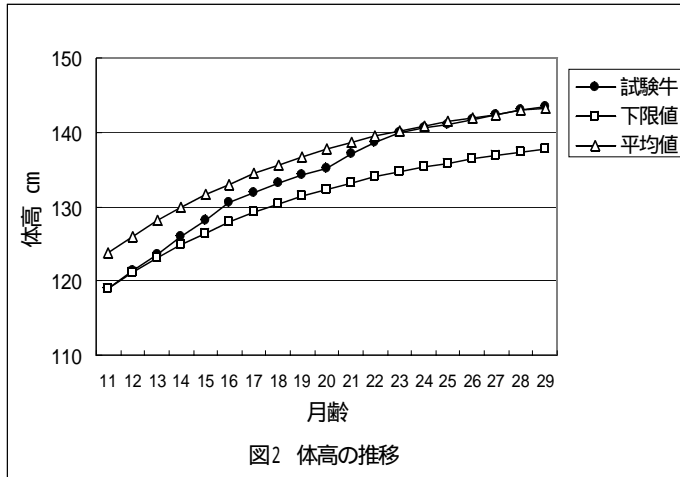


図2 体高の推移

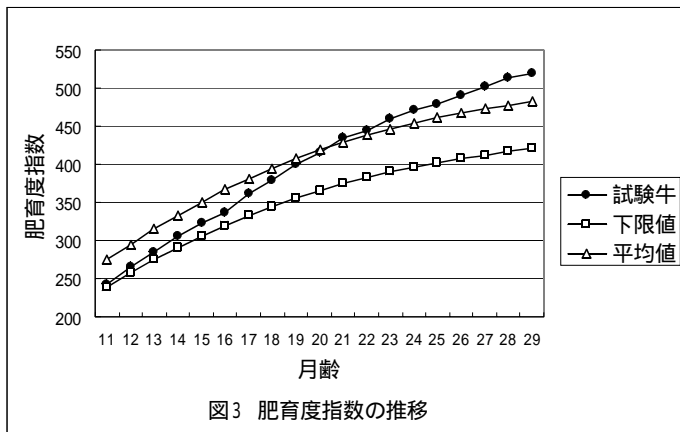


図3 肥育度指数の推移

表1 枝肉成績

	枝肉重量	ロ-ス芯面積	ハラ厚	皮下脂肪	歩留基準値	BMSNO.	BCSNO.	光沢	しまり	きめ	BFSNO.	光沢と質
	kg	Cm ²	cm	cm	%							
平均	470.9	47.5	7.4	3.4	71.6	5.3	3.8	4.3	4.0	4.3	2.8	5.0
標準偏差	40.8	7.5	0.2	1.1	2.1	2.2	0.5	1.0	1.2	1.0	0.5	0.0